
一部50円です



今も消えぬ邪気

小学生になる前の幼いころ、ナスをからしに漬け込んだ漬物を小さな弁当箱に入れてもらい、毎日婆さんとマアちゃんと近くのお堂へ出かけものだ。幼稚園も保育園もない田舎での子供の世話はおばあさんの仕事になっていた。マアちゃんの祖母は亡くなっていたので、同い年ということもあっていつも我が家へ遊びに来ていたのである。

ある夏の午後、にわかには大空をおおった雷雲があたりを暗くし、ドンドンと雷鳴をとどろかしながら大粒の雨を落としてきた。雷鳴とどしゃ降りが過ぎ去った後、砂利道のあちこちには水溜りができていた。私は、お堂で雷の恐怖におびえていたのだが、雷雲が消え去ると急にムラムラと腹立たしくなってきた。無性に怒りを何かにつけなければ取

まらなくなっていた。ほんとうは雷に怒りたかったのかもしれない。私は、何を考えたのか小ぶりになった雨の中、道の水溜りを目指して裸足でかけだした。茶色に濁った水溜りに来ると突然そこに寝そべり、手足をばたつかせて衣服を泥まみれにした。それを見た婆さんは、大きな声で泣き出した。その声を聞いて、私はさらに激しく泣きじゃくりながら手足をバタつかせていた。足が不自由だった婆さんは私を捕まえて叱ることもできず、泣いて止めようとするのが精一杯だったのだろう。

しばらくして六つ年上のシイちゃんが「よっちゃん、なにしとるんや!」と駆けつけてきた。彼女は私のズボンをつかみ上げた。私は彼女の怒った様子にビックリして泣くのも忘れ、彼女の顔を見上げた。シイちゃんは、怒った顔を笑顔にかえ「婆ちゃんを困らせることをしたらあかんで」と言った。

私は、足の悪かった婆さんが遊び相手として不足に思っていたから八つ当たりをしたのだ。婆さんが困ることをすることでうっ憤を晴らそうとしていたのである。自分の思い通りにならないと感情が歪み、やがて邪気となって心を乱す。大人になった今も、あの時のようにムラムラと沸いてきた邪気を抑えるのに苦勞することがある。子供の時、何かに八つ当たりするように暴れていた自分の姿を思い返して、当時と変わらぬ成長していない今の私がいることに啞然とする。60年の歳月は、己を鍛え成長させてくれたわけではなかった。

心の邪気を消す事は出来そうにない、せめて暴れさせないように気をつけねばならない。

連載 爺捨て山 46

梵店主

いよいよ爺捨て山も現実味をおびてきた。

親しい知人いわく「TPPに加盟すれば、日本の医療もアメリカみたいになる。診察を受ける前に、治療費が払える保険に加入しているか問われ、加入していない人は治療が受けられない。日本の国民皆保険体制は無くなるにちがいない」

私「誰もが等しくすぐに医者にかかれる制度がなくなると、貧乏人は医者にも見てもらえず路頭に迷う。それこそ悪夢の爺捨て山だ。」

知人「今度の選挙で投票する人はそれを理解しているのか。金持ちが自民党に投票するのはわかるが、貧乏人が賛成するのは理解できない」

私「わかってないと思うよ。肝心な情報が伝わっていない。」

知人「確かな情報はごく一部の人たちだけに握られていて、どうでもいいことだけが、テレビ・新聞から吐き出されている。バカバカしくなって、テレビも見なくなつた」

私「古今東西、貧乏人は権力者の都合のいいように上手くあしらわれてきた。歴史は繰り返すというが、幾百年たっても人は賢くはなれぬものらしい。」

米寿の力とは…

誰もが認める正直な人、努力家、人を憎むこともなく、悪口言うでなし、本当に律儀に暮らしている人が、いろんな事に見舞われてしまう。

「ほんまに、神さんも仏さんもあったもんじゃないわ」不公平だなアと思う。

やっぱりなア…。だから神さんに頼みごとしたら、ご加護を祈ってもただ。神さんが、仏さんが、と感謝していれば、その気が神仏に届く。それでよいのではないか。

今は、そう思うようになって手を合わせている。

私なんかは、学歴もないし、立派な素養がついているわけがなし、案外自分流に生きてきて、笑われたりたたかれたり、いろんな事に出会ってきたから。そうこうしている間に、何があっても怖くないという気持ちになったのかなあ…。
米寿を迎えるようになった昨今、その時、その時に力を振るえばいいと考えている。

人の世は 山坂多い旅の道

年齢の六十に迎えがきたら、もうとっくに過ぎたけれど、メモの中から。

還暦 六十歳 とんでもないよと追い返せ

古希 七十歳 まだまだ早いとつつぱなせ

喜寿 七十七歳 せくな老楽これからよ

傘寿 八十歳 なんのまだまだ役に立つ

米寿 八十八歳 もう少しお米を食べべから

卒寿 九十際 年齢に卒業はないはずよ

白寿 九十九歳 百歳のお礼が済むまでは

百寿 百歳 一つの節目まだまだこれから

茶寿 百八歳 まだまだお茶がのみ足らん

白寿 百十一歳 そろそろ譲ろうか日本へ

百寿を迎えた友人が居られるので、訪問する前に電話をいれたら、家族から「どなたさんですか、という状態ですの、その気持ちだけで」と、あっさり断わられた。わかる？ その気持ち。



神になった信長

日本には、神になった人々が少なからずいる。

北野天満宮の祭神「天満大自在天神」は菅原道真の霊であり、上御霊神社は井上内親王と早良親王の怨霊をまつっている。いずれもこの世に災厄をもたらず崇り神を、社を建ててまつり、鎮めようという信仰である。古代において神になる資格を有する人は怨霊となった人たちであった。

近世になると、権力者や英雄の事績を顕彰するために神にまつりあげる事例が見られるようになる。秀吉をまつった豊国神社や家康をまつった日光東照宮などは典型である。

古代においても近世においても、人を神にまつるのは死後のことである。ただ一人、生前に神になった男がいる。彼は自らを神であると宣言した。信長である。

宣教師フロイスの『日本史』は次のように記す。「…自らが単に地上の死すべき人間としてでなく、あたかも神的生命を有し、不滅の主であるかのようにならねばならぬことを希望した」。この「信長神」をまつるために安土城に摠見寺を建立する。そして高札を掲げ、摠見寺に参詣すれば、富が増し、病はたちまち癒え、八十まで長生きするというご利益を並び立て

て、「予が誕生日を聖日とし、当寺へ参詣することを命ずる」のである。

この記述を裏づける史料は日本側には残されていないので、歴史的事実とみる学者はわずかである。しかしフロイスの記述を事実だとすれば、摠見寺の立地の不可思議さ、創建年代や開山の隠蔽などの謎が解けるのである。

なぜ信長は神になろうとしたか。唯一絶対の権力者になるためには、宗教的権威・天皇と政治的権威・將軍を超える存在にならなければならぬ。そんな構想を描いていたのだろう。

天正十(一五八二)年五月十一日、神になった信長は、最初で最後の誕生祭を安土城で盛大に催したことだろう。二十九日、わずかの供を連れただけで上京する。六月二日、光秀による本能寺焼き討ちにあい、自刃。(猿(参照文献)『神になった織田信長』秋田裕裕)

俳句

土田 裕

売り場からさまぎまの風扇風機
万緑に教会の屋根沈みけり
湯呑にもこだはる妻と新茶汲む
梅雨寒や銀座画廊は昼灯し
万年の滴り岩を穿ちけり

入院4 『検査』

梵店主

病名は一応、多発性筋炎の疑いというこ
とであったが確定はしていなかった。この
病気は難病指定されている病気で、いくつ
かの検査でもって確定される。

病院は、一般の会社と同じように土日
は休みである。医師や看護師も最低の人
数が当直として勤務しているから、外泊
可能な患者は帰宅してもらった方が都合
いい事情もある。

外泊は、基本的に一泊しか認められて
いない。連泊は出来ない。土曜日か金曜
日の夜に外泊する。検査や治療がない時
間をみて、外泊届けを主治医に出して許
可を得て看護師の指示で行う。土曜日の
朝5時頃から出掛けて、日曜日の夜門限
の十時前に帰ってくる人もあるが、普通
は、病院で朝食を摂ってから出掛ける人
が多い。

よっちゃんは、入院早々に外泊して家
に帰ったが、内心「これが家で寝る最期
かも知れない」と思っていた。たまたま
夏休みでいた娘も、よっちゃんが階段を
一段登ることさえ難儀している様子を見
て、ほんまに病氣なんだと思っただけ。
大好きな酒も飲む気がせず、タバコも
受け付けなかった。外泊しても病院と同
じように寝てばかりいた。

最期と思った外泊から病院に帰り、翌
日から長い闘病生活がはじまった。

病名は一応、多発性筋炎の疑いというこ
とであったが確定はしていなかった。この
病気は難病指定されている病気で、いくつ
かの検査でもって確定される。

この病気は、特定疾患として公的援助が
受けられる希な病である為に、検査項目が
多い。血液検査からはじまってMR、CT、
筋生検など病院中の検査機器を使うので
はないかと思うほど幾つもの検査を受け
つづけた。

外来で担当してくれた小濱医師が病室
に来て、よっちゃんに「検査結果を待つて
いたら時間がかかりますから、検査と治療
を並行してやります。よろしいですか」
よっちゃんは、「すきにやってください」
と答えた。小濱医師は、「特定疾患の手続
きもして下さい。保健所へ行って書類をも
らつて来て下さい。治療費が免除になりま
すから」。よっちゃんは、治療費がタダに
なると聞いて、うれしい想いと申し訳ない
気持ちとで複雑だった。

よっちゃんを担当してくれた美人医師
の森さんは、小濱医師より後輩で治療の
アドバイスを小濱医師より受けていたが、彼
女の優しさは入院後も変わらなかった。
森医師は滋賀の湖西出身、K大医学部を
首席で卒業し、ハーバード大学留学後、大
阪の病院勤務を経て、H大病院の免疫内科
の医局へ大学院生として来ていたのであ
る。小濱医師も同じ大学院生であった。

大学医学部の医局について、説明しな

ければならない。大学医学部は研究と医
師養成の機関である。毎年多くの医学生
に現場体験させ一人前にする教育現場で
あり、未解明な病理の研究も行っている。

その際、どうしても必要なのが難しい患
者である。よっちゃんのような難しい病
気の患者は研究上必要である。

まあ、難しく考えずによっちゃん流に
いえば、大学山岳部とよく似ている。教
授をリーダーとして約25名程の部員た
ちがいると考えたらよい。それぞれの部
員は入局した年次で後輩先輩が決まり、
後輩は死ぬまで先輩に頭が上がらないの
である。一番若い部員は、先輩たちから
何かと雑用を言いつけられから、新入り
が早く入ってきてくれる事を願う。

昔、インターン。今は研修医という。
大学医学部の6回生を終え国家試験に受
かり、研修医を二年した医師や、幾つか
の病院勤務などを経て、さらに経験と知
識を積みみたい、研究したいなど色々な想
いで医局に授業料を払って5年間の研修
を目指している人たちである。

ある医師は、よっちゃんの「一人前の
医師になるのにどのくらいの年月がある
の」という問いに「そうですね。研修医
を終えてから、10年はかかりますね。
先輩に教えてもらったり、自分で研究し
たりして、患者に向き合うようになるに
は」と答えた。よっちゃんは「大変なん
だなあ」と思った。



信長さま限定・にわか歴女

人間、自分の身に何が起こるかなんて
わからないものだ。自慢ではないが、「歴
史」が嫌いだった。自分が生まれる何百
年も前のことなど、興味が持てない。だ
のに、学校で年号を暗記するよう強要さ
れる。仕方なく、テストに出るとされる
いくつかを必死で覚えたつもりだが、い
ま、思い出せるのはただひとつ。「いい
国（1192）つくろう、鎌倉幕府」。

これも、本当に覚えていたわけではなく
て、平成十一年九月二日に、弟の子供（二
男）が生まれ、弟の嫁が嬉しそうに言っ
たのだ。「この子の誕生日はいい国つく
ろう。ひよつとしたら、世の中動かす大
物になるかもしれませんよ、イヒヒ
（笑）」。平成十一年九月二日でイイク
ニ。なるほどね、というわけで、この年
号だけは覚えていた。

それぐらい、歴史にうとい。その私が、
今や織田信長の生まれた年も、死んだと
される年も、ちゃんと言えてしまうの
だ。

きっかけは、深夜枠のテレビドラマ、
「信長のシェフ」。平成のシェフが信長
の料理人になるという「ありえへん」設
定なのに、信長役が長寿ドラマ「相棒」
の相棒役、及川光博という「え〜っ」と
いうキャストイングなのに、突然、私

は恋に落ちた。ドラマにはなく、現実の信長さまに。四百年前に死んじやってる、歴史上の人物に。

世には、「歴史好き」の歴女なる方々がいることは知っていたが、正直、理解できなかった。戦国武将が好きってどーゆーこと？人を殺したり、他人の城を奪ったり、町や村を焼き払ったり、極悪非道の犯罪者やんか。「時代背景が違う」と言っても、わざわざ懂れたりするのは変！と思っていたのに、ある日突然、「信長さまのことをもっと知りたい！」という、信長限定、ワンポイント歴女になってしまったのだ。

歴史の勉強をさぼってばかりいたので、一般常識的なことさえ知らないから、何か一つ知るたびに、嬉しくて誰かに言いたくてたまらない。字を覚えればかりの小学生が、読めるひらがなを吹聴する、あの感覚だ。

「石山本願寺って、どこにあったか知ってる？」。私だって、先月までは知らなかった。知りたいとも思わなかった。でも、今は、便利な世の中で、パソコンを開いて、「石山本願寺はどこ？」と尋ねると、ちゃんと、大阪城があるあたり。石山本願寺の跡地に大阪城を建てた、と教えてくれるのだ。おおっ、そうだったのか！

NHKの大河ドラマなども皆目見えないから、知識はすべて新鮮。若い

らくの恋は燃えるというが、それに近いものがある。

ある朝、目が覚めてふと思う。「信長さまのお墓ってどこにあるんやろ」。パジャマのままパソコンに向かう。そしたら、出るわ出るわ。あまりの多さに驚愕して数えなかったが、ざっと五〇箇所ぐらいだったか。本当は本能寺では死んでいなかった、という説もあって、京都以外の場所にも信長の墓とされるところはあるらしい。

でも、まあ一番信憑性があるのは、京都の阿弥陀寺。その住職が、織田信長の知り合いで、本能寺の変のあと、信長の遺体をこっそりと寺に運ばせた、とされている。にわか信長ファンとしては「阿弥陀寺」に行かねば、と思いつ。今度は、阿弥陀寺を検索。場所を調べ、最寄りの駅名を手帳に控え、写真に見入りしてから、やっど。パジャマを着替えるのだが、既に、二時間パソコンに向かって、「信長さま遊び」をしていた計算だ。これでは早起きをして意味がない。

地下鉄に乗っても、今まで気がつかなかったものに目がいく。焼酎の車内広告。「清州城 信長 鬼ころし」。そこに、信長と書いてあれば、ワクワクして見入る。「あらあ、信長さまがこのようなところにいる！」

そうなった人間が狂喜乱舞できる場所は本屋だ。「信長」と書いてあれば、

文庫本や雑誌など安い本は買い、高い単行本はお立ち読み。とくに、研究書の類は高いので、「信長」の部分だけ、拾い読み。これがまた、面白い。「桶狭間」に関するくだりなど、「書いた先生、見てたんやろか？」と思うぐらいだ。

買って帰った小説の方は、狂い読み。ご飯食べながら読み、深夜まで読み。連休は、ふだんなら母の家に帰るのだが、もももごと言って、帰らず。友だちには「実家に」とたばかって、朝読み、昼読み、夜読み。「たばかって」と言ってしまったが、微妙に、言葉が戦国調に。無理もない。いまや、愛読書は「信長燃ゆ」。信長が好きになって最初にこの本を読んだのだが、以来、信長のイメージはこの作中の人物で固まった。あと、「国盗り物語」「空白の桶狭間」「女信長」、みんな一気読み。「続・フロイスの見た戦国日本」とか「歴史のなかの邂逅2」など、これまでの私なら死んでも読まなかった本も「信長さま」のことを知りたさにくいように読んでいる。

その「邂逅2」にあったのだが、「信長は摂津に侵入し、いまの高槻市芥川にあった三好氏の城を陥とした」。芥川の皆さんには、信長は敵か？と思つたが、ま、時効つてことで。

しかし、ある日、突然に信長さまに恋に落ちるって何ゆえ？ 本当に自分でもわからない。なんか、エンジンがかかってしまったのだ。「この男、すごす

ざる！ 天才！ かつこいい！」と。

私なんか信長さまに顔を合わす機会があったとしたら三秒以内に殺されるタイプだ。信長さまは短気で、短い言葉で話し、人がグダグダ言うといきり立つ。ノロマで、用件を言うまで、時間がかかり、そのうちに話したかった用件を忘れる私を信長さまが生かしておくわけない。信長さまはズルイヤツや働きの悪いヤツも許さない。この点でも、私、瞬殺だ。それに、「焼き討ちとかしたらアカンやろ」とつい言ってしまう：ああ、命がいくつあっても足りない。

それなのに、信長さまのとりこになった私は、いそいそと計画している。まずは、阿弥陀寺にお参りに。本能寺の変がおきたのは一五八二年の六月二日。そう、お命日なのだ。滋賀の安土城址も行きたいし、本能寺（信長茶寮）とやらがオープンしているらしいも外せない。ふふふつ、待ってるよ、信長さま！（AO）



信長の遺骸が納められている廟墓（京都阿弥陀寺）

工場勤務よさらば

明石 幸次郎

私は、K社に1974年入社した。本社、工場と7年間、資材調達の仕事を経験し、いつかは、海外部門で営業をやりたいと希望していた。

工場に転勤して2年目の1981年、31歳の誕生日を迎えた夏に、海外事業の売り上げ拡大を図れという社長方針が打ち出され、関係3工場から若手を中心に5人程が選ばれ、海外営業部門に回されることになった。その中の一人に何故か私も入っていた。

その時は、工場に転勤して1年半程が経ち、それまでの本社勤務と何もかも全く違う、工場の管理された雰囲気、しくみ、仕事のやり方、現場の人、取引先との人間関係、泉州弁の独特の言葉遣いにも慣れてきて、部品調達の仕事にやりがいを感じていた。上司から転勤の内示を受けた時は、今、自分が海外部門に移らないといけないのか、直属の上司に理由を聞いてみた。

俳優“仲代達矢”似の風貌で、自他共に認めるハンサム上司は、自分の容姿と知力に自信を持ち、自意識過剰なところがあり、それが鼻につき、外観と言うことの割には中味が伴わないと社内外の人からは、評判が良くなかつ

た。

私に対する答えは「君は人事申告書にいつかは海外事業部転勤希望と書いていたなあー。英検2級の資格をもっている、工場の実務経験もあることで、選ばれたのだ。君の希望に沿った人事で、何か不満でもあるのか？ 君は大いに喜ばないといけない。それに、今回の異動は、これからは海外市場を伸ばさないとけないという会社の方針に沿った人事であるので、嫌と言うことは、会社の方針に逆らうという事になるぞー。まあ、この工場を経験したことを活かし、大いに海外の売上げを伸ばして、我々の工場の仕事を増やしてくれよ！」と言われた。

“仲代達矢”の喜ばないといけないとか、逆らうと君の将来はないぞと言うような言い方に対し、生来、性格が素直でない、その上、反骨精神が変に強い、へそ曲がりの私は、反射的に、「英検2級なんか何ほのもんですか、海外では屁のツツパリにもなりませんし、工場経験と言っても、やったこととしては、協力会社M社の最大の取引先の自動車メーカーがフル操業になったあおりで、ウチへの部品供給が後回しにされて、納期を守らず、欠品が何日も続き、そのため、ラインを何度か止めてしまい、その度に現場の職長、作業長から怒鳴られた苦い経験くらい

です。あとは何とか自力で！そのM社の対応とT社への部品の切り替えをやったこと位で、課長がよく言われていた頭を使った“戦略的部品調達”など一度もやってません。毎日、走り回った経験だけで工場にいた経験と言われなくても、これからどう活かせるのですか？」と、私が皮肉交じりで反論の問いかけをした。

それは、M社への対応、その他数多くの協力会社の品質クレーム、部品の値上げなどで、苦慮して、悩んで、幾度か、この上司に対応策の相談を持ちかけたが、その度にその解決は担当者である君の仕事や、君がやらないと誰がやるのかと、冷たく突き放されたことが咄嗟に思い出したのである。

上司の仕事は何や、仕事の経験と知識の乏しい部下が困り抜いて相談したら、全部の答えを出さずとも、せめて、何らかのヒントを教え、サポートしてくれるのが、上司の役割であろうと思っていた。

“仲代達矢”課長は「工場で走り回った事が、君にとつての何より貴重な経験や。部品を供給し、ラインを維持し、生産を続けることが如何に大変かを、当に身体を使って覚えたのや。本社では味わえない経験である」と反論された。

もうこれ以上、この人と話をしても、

感情的になるだけで、何も得る事がない。

こんな上司にだけには、将来、ならないようにしようと思いに決め素直に「分かりました。短い間でしたが、色々ご指導頂き、貴重な体験も工場でさせて戴き、おっしゃる通りに、この経験を海外部門で生かそうと思います。大変お世話になり有難うございました」と、31歳になり、少しは大人になったかと、我ながら思えるような、円く収める儀礼的な言葉を発した。

辞令が出てから10日間位は毎晩、多くの職場の人から声を掛けられ、又、取引先の人からも、個人的に送別会をしてもらい、毎晩宴会が続くので、自宅に帰ると女房にあきれ返られた。

その中でも一番嬉しかったのは、私が大変な目に遭わされたM社の専務が一席設けてくれて、「本当にAさんには迷惑を掛けて申し訳なかった。今までのK社工場の資材の火とは違い、きれいな収め方をして貰い、こちらも御社の仕事をお返ししたお陰で、自動車メーカーに経営資源を集中する決断が出来て、何とか生き残れるようになった。本当に感謝します。」と言われたことであつた。その晩は何軒か専務につれられて、はしごをして、前後不覚になってしまい、自宅に帰らずに、気が付けば、この専務の豪邸に泊ってもらっていた。その翌日からいよいよ、本社にある海外部門の初出勤であつた。



おもしろうて

やがてかなしき鶺鴒かな

芭蕉

この芭蕉句に出典を持つ「やがてかなしき」というフレーズは、さまざまにアレンジされている。村上春樹のエッセイ『やがて悲しき外国語』であり、ポルノグラフィティの曲「やがて悲しきロックンロール」などである。それらがオリジナルのニュアンスをどのくらい反映しているかは知らないが、フレーズが人口に膾炙しているのは確かである。その背景は語呂や響きがいというだけでなく、そこはかと漂う悲哀を強調できるからだろう。

そんなノリで一席ぶってみようと頭をひねってみたところ、「おもしろうてやがて悲しき蛍狩」というのが浮かんできた。五月下旬から六月上旬にかけて、京都の疏水べりではゲンジボタルが観察できる。疏水といっても、哲学の道や北白川のあたりだから「疏水分線」とする方が正しい。そんな疏水べりの蛍狩なのだが、五月の末に様子をみに行く機会があった。結果は1〜2匹がちらほらと飛ぶ程度だったが、それでも目の前をほのかな蛍火が泳ぐさ

まには風情めいたものも感じられた。

それだけの話ならメダタシメダタシで終わるのだが、そうならなかったのは、せつかくだから写真を撮ってみようと思いついたからである。カメラを向けたところ、コンデジでは蛍の光を捉えるにはシャッター速度や露出などの仕様が不十分らしく、いくら試しても真つ黒な景色が映るばかり。肉眼なら楽しめても写真にしてみると、あら残念ということ。「やがて悲しき蛍狩」。

少々お粗末なのでもう一つ。「勇ましくてやがて哀しき軍歌(いくさうた)」というのはどうだろう。軍歌(ぐんか)でまず思い出されるのは「勝つてくるぞと勇ましく」で始まる「露宮の歌」である。人によって変わるだろうが、私の場合、軍歌のスタンダードを挙げると言われると「露宮の歌」が出てくる。そんな「露宮の歌」だが、嵐山は大堰川の右岸に大きな歌碑が建てられている。ところが、その碑の存在はあまり知られていないようだ。嵐山が京都を代表する一大観光地とはいえず、大堰川の右岸、すなわち渡月橋を基準にすれば阪急嵐山駅のある側は注目度が下がる。加えてお洒落なカフェでもなければ可愛い和雑貨のお店というわけでもない。ターゲットが石碑となると、そんなものに目を向けるのは、も

とより希少種と相場が決まっている。しかも相手が軍歌なら、なおさらのこと。そんなこんな事情によって嵐山の「露宮の歌」碑はみごとなまでに苔むした状態となっている。

見ようによってはわびさびの味わいだが、手入れもされずに放置されているといった方が数段正しい。碑面に刻まれているのは、もちろん「勝つてくるぞと勇ましく」である。そして揮毫は「陸軍大将松井岩根」とある。南京事件がらみのキーパーソンとして取り上げられる人物である。南京事件はデリケートすぎる話題なので素通りするにしても、「露宮の歌」碑のついでには建碑事情などを調べてみたい気はする。

それはさておき、今回のテーマに戻そう。この大堰川畔に立つ碑を見ていると「哀しき軍歌」というフレーズが頭をよぎるといふ話である。有名な観光地でありながら顧みられることのない現実が哀しさの理由なのだが、実はそれだけではない。フレーズの勇ましさと裏腹に、歌詞そのものが「やがて哀しき」を体現しているように思うのである。一般には歌い出しばかりが知られているが、歌詞(藪内喜一郎・一九三七年)を読むと、涙なしにはと言うのは大げさでも、痛いくらいの悲壮感が伝わってくる。

勝つて来るぞと勇ましく

誓つて国を出たからにや

手柄たてずに死なれよか

進軍ラップ聞く度に

まぶたに浮かぶ旗の波

有名な歌い出しも「誓つて国を出たからにや」と続くからには、単純に勇ましいだけのスローガンではない。根拠のないカラ元気とみることもできる。それに思い出されるのは見送りに集まった人々が振る「旗の波」だというのなら、地元の期待が重圧となつて前線に押し出される兵士の悲しみをうたつた詩と思えてくる。敗戦と亡国という結果ありきの解釈だと言われるとその通りなのは認める。しかしそれであっても、本心を押し殺した哀しみが行間に読めてしまうのである。戦争末期には、言葉にならない周りの空気を汲んで、進学を諦めて自ら予科練を志願したという旧制中学の生徒もいたというが、そうした姿さえオーバーラップしてくる。作詞者・藪内の意識には、おそらくそんな思いはなかったと思う。しかし歴史が立ち至った結果をつきあわせた時、無意識のうちに刻み込まれた情念がほのかに透けて見えることもある。

どのような事象であれ、後世のまなざしにさらされると、同時代的に感じられていたものとは異なつた風合いが浮かび上がる。そのこと自体はけつして珍しいことで

はない。戦意高揚のキャンペーン用に募集された歌詞が、本来の意図とは百八十度反対の解釈を許してしまうのも、ある意味での皮肉と言えるだろうし、それが歴史というものとすれば、それもまた頷かざるを得ない現実である。

私の海外経験 19

豪州時代 3 (86年10月〜90年5月)

土田 裕

リタイアメント・ビザ

確か一九八八年だったと思うが、さる一部上場会社の副社長だった人が夫婦で当地で引退後の人生を送るための家を探しにお出でになった。当時の豪州のリタイアメント・ビザ取得の条件は①年間三万ドル(約二七〇万円)の年金・投資収入、②三十五万ドル(三一〇〇万円)の投資可能な資金を持っていること③年齢55歳以上などであった。

当時の日本はバブル景気に沸いており、日本の小金持ちがシドニーやゴールドコーストの住宅を買うために大挙して来ていた時だったが、彼らは移住まで考えているわけではなかった。ご夫婦と一緒に食事をして、シドニー近郊の住宅の相場や、現地で生活する際の問題点などを説明した。老夫婦にとって金銭的には

全く問題ないが、豪州人も個人主義が徹底しているので隣付き合いなどはほとんどないこと、日本食材は手に入るが、割高なのでヨコ飯に抵抗はないか、殆ど車での移動となるので運転は問題ないかなど、いろいろ説明したら奥さんは心配そうな顔を

されていた。そうは言っても、気候は年中温暖、物価は割安、海が近いので釣りや、クルージングが好きの人には別天地であることなども説明したら、大変興味があり、やっぱり当初の決心通り移住したいとのことで、次の候補地であるゴールドコーストへ発たれた。

ビザ取得条件はその後、度々改訂され現在では①年間5万2千ドル以上②50万ドル(大都市近郊は75万ドル)に上がっている。要はお金を持っていない人には移住してほしくないと言うことらしい。三井の豪州駐在員でも定年後、当地へ舞い戻ってきた人が数人いて、私の前任部長もシドニーに高級マンションを所有し、年に二回は遊びに来ていた。

当時、本社の開発建設部はケアンズやゴールドコーストに高級リゾートを開発し売り出していたので、この住宅を購入する人も多かった。但し、後にこのリゾート開発で組んだパートナーの男が放漫経営で破産し開発建設部は大損を被った。人の縁には血縁、学縁、職縁、地縁があると、縁がそれら殆どの縁を断ち切ると移住するにはそれなりの覚悟が必要だと

思う。私の場合はいずれの縁も大事にしたいと思うし、新天地で今から友達を作るほど社交的でもないのに移住するつもりは全くなかった。

オーストラリアの都市

豪州は日本からの観光客も多く、新婚旅行の行先でもハワイに次いで人気があった。ここでは観光案内を書く積りはないので、私の経験談を記してみたい。

シドニー：シドニーの街で大きなビルといえばホテルか銀行、証券会社のものである。豪物のシドニー本店もステート・バンクセンターなるビル

の三〇―三一階にあった。ハンブルグ、シカゴの場合は車で通勤していたが、シドニーは東京と同じで、市内に駐車場が不足しているの一般のサラリーマンは電車またはバスで通勤する。ハーバーブリッジの北側、ノースシドニーという住宅街からは船で一五分でサーキュラー・キー船着き場へ着くので、ここからシティセンターまで徒歩で通勤できる。

私の場合は郊外の最寄りの駅まで毎朝、女房に車で送ってもらって電車通勤をしていた。日本の電車と異なり時間は不正確だが、何時も空いていて座って通勤できた。

昼食は他部の人と一緒に近くの中華か日本食、たまには室内バーベキューの店へ行く。邦人は1回で五―一〇ドル使うのだが、現地職員はそれほどの余裕はなくスナックで二ドルのホットドッグなどのファーストフードを食べていた。

私もたまにファーストフードの店でアメリカ式に「ハツダツグ」と注文したら全然通じず日本式に「ホットドッグ」と言ったらすぐ分かってくれた。豪州は英国女王を君主とする立憲君主国だが、生活スタイルは完全にアメリカナイズされていて、ホテルやファーストフードの店は米国ブランドが大半であった。

シドニー湾はリアス式海岸で入り組んだ入江がいくつもあり、海岸に住んでいる人も多いが、そうでなくても車で一分も走れば海岸へ着くので、休みの日にはマンリー、ボンダイなどのビーチで海水浴や食事が楽しめる。私は行ったことがないのだが、ヌーディストビーチも数か所あった。

またK君が釣り好きで彼に誘われて何度か魚釣りにも出かけた。釣りのベテランは朝早く出かけるのだが、我々は昼ごろになってからでかけるのであたりはずれが大きく、おけらの時もしばしば釣れた。ある時、太刀魚が大量に釣れて処分に困ったこともある。自分で釣った魚だけでは食用には不十分なので月に2、3度はフィッシュマーケットへ買いに出

かけた。魚は非常に安く現地人があまり食べないアジ、タコ、イカなどはキロ当たり2ドル(180円)だった。但し海水温度が高いせいか鯛や鰺など日本でおなじみの魚の味は日本より不味いと思う。

年中温暖な気候なので、日本からのお客のほとんどがゴルフを日程に組み込んでいて接待ゴルフの機会も多く、そのため部長は会社からゴルフ場の会員権をもらっていた。日本と違って会員権が大変安く、5千ドル(45万円)くらいだったと思う。私が会員となっていたリバプール・ゴルフクラブはシドニー郊外西方

にあり、車で小一時間かかったので接待にはやや不便だったが、プライベートでもしばしば出かけた。日本人の奥さん連中もゴルフ、テニス、水泳など屋外スポーツを大いにエンジョイしていた。

シドニーは坂の多い街で中心街の地盤は岩でできているという。サーキュラーキーの近くにロックスという旧市街があり、昔ながらのパブや土産物店が並んでいる。ここには昔の牢獄の跡もあり観光ルートとなっている。

豪州のお土産といえばオパールが有名だが、外貨稼ぎのために採掘しすぎたせいか、大粒のものは希少品で高く、観光客用の割安品は粉末から合成しているとのことであった。

豪州には人口の一〇倍くらいのカン

ガルが生息していて、増えすぎると穀物を食い荒らすので、ライセンスを持った猟師が毎年何十万頭も駆除していて、その肉はジャンプミートとして肉屋で、皮は靴や敷物などで土産物店で売られていた。小物ではカンガルーの睾丸で作った小銭入れがあり、日本へのお土産に持ち帰ったが、評判はいまいちであった。

メルボルン…仕事の関係でメルボルンには足しげく通ったが、歴史的な建物や文化が残っており、ロンドン、パリなど欧州の街に似ていた。落ち着いた雰囲気の中でエコノミスト誌で世界で最も住みやすい街にランクされたという。シドニーには無い市電(トラム)

が走っていることもハンブルグやアムステルダムを思い出させた。メルボルンのあるビクトリア州にはBHPなど製造業の大手が集中していて豪州三井の化学品、食品、非鉄の部長はメルボルンに駐在していた。

ある夏、女房の友達が親子で遊びに来たので当家4人と車でシドニーからメルボルンまで旅行した。その旅行で最も印象に残っているのがフィリップ島のペンギンパレードである。メルボルン市内から2時間くらいドライブするとフィリップ島という岬がある。

日没後、体長30センチ位の小さなペンギンが群れをなして浜辺に上がっ

てくるのが見られる。最初は1、2羽の斥候ペンギンが姿を見せ、外敵がいなかを確認、仲間告げると、ぞろぞろ群れを成して上がってくるのである。昼間は数百キロも離れた海で魚を追っかけているが夜になるとあの小さい鳥がそんなに離れたところから迷うことなく毎日帰ってくるのが自然界の不思議である。中にはサボって一日中、草むらに隠れているペンギンもいた。

ブリスベーン・ゴールドコースト…日本からの新婚旅行は、たいていシドニーとゴールドコーストを回るコースのようである。

ブリスベーンはシドニーの北900キロあり、温暖湿潤の気候で一番寒い時(7-8月)で10度C、暑い時(1-2月)は40度Cになる。人口は100万人強で豪州では3番目の都市である。シドニー、メルボルンに本社のある企業の支店があり支店経済都市と言える。

1988年にブリスベーン万博があったので、家族で行ってみた。大阪万博の(1970年)思い出があるので期待していたのだが、大した見世物もなく、規模も大阪に比べるとはるかに小さく、がっかりした。

ブリスベーンのあるクイーンズランド州には大規模な炭鉱があり、三井の石炭部もここから石炭を輸入し大手電力会社、鉄鋼会社に売っていた。物資部は石炭運搬用のコンベアーベルトとベルトクリーナーなどを売っていた。余談だが、私が居たころは三井が日本向け石炭で最大のシェアを占めていたのだが、2009年ごろ三菱がBHPと組んで同州の鉱山を買収したため、同社がダントツとなり、現在では三菱は利益の40%を石炭商売で稼いでいるという。

ブリスベーンから80キロほど南にゴールドコーストがあり、年中観光客でにぎわっている。長い海岸線に沿ってリゾート用ホテル、マンションがあり、ゴルフ場もいくつもある。

パース…パースはシドニーから西へ飛行機で4時間くらいで到着する。シドニーとの時差は2時間、ハイウエーが縦横に走っていて、世界で一番きれいな街ともいわれている。パース市の人口は九〇万人とのことだが、パース都市圏では人口150万人でオーストラリア4番目の都市である。残念ながら商売が殆どなかった。会議で2度出張しただけで、観光はしたことがない。地中海性気候で夏の最高気温45-46度C、冬の最低気温7-8度Cだという。やはり海が近いのでホエールウォッチングなどの観光スポットも多い。



ゴールドコースト

りした。

光スポットも多い。